

老いの「場」の研究

— 自殺防止のための「場」を求めて —

松 井 富美男

【キーワード】 自殺、高齢者、老化、鬱、銭湯文化

1. はじめに

日本の年間自殺数は近年3万人以上である。なかでも40～50歳の中年男性の自殺数の増加は社会問題にもなっている。¹⁾厚生労働省は2002年に自殺防止対策有識者懇談会を設置して「自殺予防に向けての提言」²⁾を公表した。それによると、中年男性の自殺の社会的背景として「中年危機」があるとされる。確かに「中年危機」は、日本社会全体からみても深刻である。40～50歳といえ、会社や企業にとっては、管理職などの職務を担う中心的な年代である。彼らが仕事や健康や家庭上の問題を色々と抱えるうちに鬱になって、自殺に追い込まれるケースが目立って多くなっている。「提言」はこうした中年男性の現況を指摘し、彼らの自殺が「自由意思」によるものとは違い、「追い込まれての死」であることを強調し、自殺予防対策が必要な理由とその方法を提示する。こうした方向づけは、自殺防止を重要課題として位置づけるかぎり必要であろう。だが高齢者の自殺に関しては異なった観点からの分析も必要である。以下では、まず棄老や殺老の慣習、自殺の種類、高齢者の自殺原因などについて検討し、そのうえで高齢者の自殺防止の「場」のモデルとして銭湯文化を取り上げる。

2. 「自殺」と「人殺し」の区別

西洋の伝統に従えば、「人殺し homicide」と「自殺 suicide」は法的にも慣習的にも明確に区別される。すなわち、過失か故意かに関係なく、人間を殺せば「人殺し」あるいは「他殺」であり、自ら命を絶てば「自殺」である。だが今日、安楽死のようなケースにおいては、この基準そのものが揺れ動いている。耐えがたい苦痛を伴う不治の病に冒された患者が「殺してほしい」と懇願し、医師がその願いを聞き入れて、筋弛緩剤や塩化カリウムなどを用いて患者を死なせるとき、この行為が「人殺し」に当たるかどうか論議されている。死を引き起こすという「行為」だけに着目すれば、この行為は死にゆく人自身によるものではなく、他者によるものなので「人殺し」である。しかし死にゆく人は「早く死にたい」と願っているのだから、その意思を尊重すれば、形態的には自殺に限りなく近い。だから表面上は「人殺し」であっても「自殺」に分類さ

れてもよいように思われる。このように安楽死の難しさは、行為の意図と行為の結果とが複雑に関係するところに存する。

「人殺し」と「自殺」の区別は、文化人類学や民族学でもしばしば問題になる。少し前の事例になるが、この問題を考えるうえで、パプアニューギニアのカリアイ地区ルシ族の未亡人殺しは参考になる。カウント (Dorothy Ayers Counts) によれば³⁾、カリア地区ルシ族村は平等社会であるが、老人と長兄には例外的に特権が認められている。とはいえ彼らはその権利を自由には行使できない。それは、もし悪いことをすれば先祖の魂がやって来て恐ろしい制裁を加えるという伝説を、彼らが信じるからである。それでも女たちは夫からしばしば虐待される。そのとき彼女たちは我慢するか、自殺するか、さもなければ自分の親族に訴えて報復してもらうしかない。訴えられた親族は、夫の家を取り囲み、うなり板でもって怒りや嘆きを表明して、女たちへの虐待を止めさせ、代わりに夫から貝殻の貨幣をもらう。こうすることは、男たちの所有物を傷つけたことに対する夫の償いである。

さらにまた、夫が死ぬと、残った婦人が彼の親族によって殺されるという奇習も存在する。⁴⁾ その要点を次のとおり。①未亡人に対する夫の男親族の行為は「儀式的な殺し」である、②未亡人は死にたいと思い、夫の男親族もそれに同調する、③死は社会を分裂させない普通のものである、④未亡人の殺されたいという要求は合理的である、⑤未亡人は子どもの世話になることに耐えられない (食糧の欠乏)、⑥夫婦はあの世でも一緒になれる可能性がある、など。

①については、未亡人殺しを地元住民は「自殺」とみるのに対して、ドイツやオーストラリアの当局は「他殺」とみており、二つの見方が対立する。すなわち、未亡人殺しは、純粹に行為の観点からすれば「人殺し」であるが、彼女自身がそれを望んでいるという意思の観点からすれば「自殺」である。この争点はそのまま安楽死問題にも通じる。ただし、安楽死の場合には、このほかに苦痛があるとか、不治の病であるとか、いった条件が加わるので注意を要する。⑤については、安楽死よりも古くからある殺老俗や棄老俗とのかかわりが強い。

穂積陳重によれば、老人への社会的な取り扱い、食老俗に端を発し、殺老俗と棄老俗を経て退隠俗に至ったとされる。⁵⁾ 彼は次のように述べている。「蛮族が殺老俗を保続するに付ては、…父老をして早く極楽往生を遂げしめ、未来の幸福を享けしむる為めなりといふが如き口実を設け、敢て『口を減らす』が為めに老朽者を殺すことを公認せざるなり。是れ実に原人と雖も亦親愛の性情を固有し、高齢者を殺すに於て、少しく其良心に愧づる所あるに至れるの証とするに足るべし。』⁶⁾ と。殺老俗の目的は「口減らし」である。棄老俗の目的も同じである。海外で大きな反響を呼び、ボーヴォワールも注目した『檀山節考』の主題もこれである。⁷⁾

いつの時代でも遺棄の対象となるのは、乳幼児、高齢者、障害者といった社会的弱者であった。日本では、棄老俗はだいたい仏教文学の題材として扱われているので、本当に棄老俗が存在したかどうかは明らかではない。例えば『枕草紙』と『今昔物語』には孝養を功德とする話が載って

おり、その中で棄老俗が言及される。その対象は、前者では「四十になりぬる」人であり、後者では「七十に余る人」である。⁸⁾また姥捨山伝説は『大和物語』や『今昔物語』などに見える。⁹⁾両書の間内容的な異同が認められるものの¹⁰⁾、主題は老人を遺棄すれば自分も同じ目にあうといった因果応報である。さらにまた、柳田國男の『遠野物語拾遺』にも、60歳以上の老人がデンデラ野に棄てられたという記述が見える。¹¹⁾

これらの話の基になっているのは伝説や伝承である。よって棄老俗が実在したかどうかは、ここからは明らかではない。因みに民俗学者たちは、日本には棄老俗は存在しなかったと見ているようである。¹²⁾だが棄老俗の存在をめぐる議論はそれほど重要ではない。それよりも、現代のヒューマニズムからすると、棄老俗が残酷な習俗として映じることのほうがむしろ問題である。思えば『檀山節考』の成功は、このような甘美なヒューマニズムを徹底的に排除したところにある。ここにはおりんと又やんという対照的な人物が登場する。おりんは物分かりのよい家族思いの老人であり、又やんは往生際の悪い自己中心的な老人である。村には口減らしのために、70歳になると「檀山まいり」に行かなければならないという掟がある。この根底には、全体の利益を慮って、新しい世代のために古い世代を犠牲にすることを善しとする世代間倫理がある。小説ではおりんは棄老俗の象徴として、又やんは殺老俗の象徴として描かれている。

殺老俗は老人を意図的に殺すのに対して、棄老俗は老人を自然のままに放置する。しかし結果的に見れば、両者は老人を死に至らしめる点で同じである。この問題は、生命倫理で言えば、積極的安楽死と消極的安楽死の道徳的相違をめぐる議論に逢着する。患者を作為的に死なせる前者と自然任せに死なせる後者とでは、法的には「作為」と「不作為」という違いがあるものの、患者を死なせるという目的からすれば、両者は等価である。これはジェームズ・レイチェルスによって展開された有名な議論である。¹³⁾

その点はひとまずおき、殺老俗についてももう少し見ておこう。穂積によれば、最初は飢餓や戦争時に生存競争から老人や病人が犠牲にされたが、その風習が未開社会に受け継がれ、やがては老生は恥辱であるが、自殺は名誉だとする社会通念を生み、殺老俗となったとされる。しかし老親殺しが徐々に習俗化したという理由だけでは、殺老俗の説明として不十分である。いくら習俗であっても、自分を愛育保護してくれた親の命を奪うことになれば、よい気がしないし罪悪感に苛まれよう。そこで「種々の理由を案出して僅に其良心を慰め、且つ被殺者をも慰むる」¹⁴⁾ために、「他界説」のような宗教上の迷信が生じたと推定される。その内容は、現世と来世の生活は同一であり、老衰してからよりも心身が健全なうちに来世に旅立つほうがよく、その手助けとなる殺老は「至孝」や「慈愛」である、というものだ。¹⁵⁾

この世とあの世を連続的に結び付ける信仰観は、古代日本人の心性にも伺われる。「常世」や「根の国」はこの世と続いており、その間をイザナギ、スサノオ、オオクニノヌシらは自由に往来している。¹⁶⁾ただし、あの世に対するイメージは「穢れた暗黒の世界」「死の世界」「不老不死の世

界」など色々である。いずれにしても、このような信仰観は、老人をあの世に送り出すのに実に都合のよい考え方である。ルシ族の未亡人殺しが「合理的」な行為として解釈される背景には、こうした現実主義的な信仰観がある。未亡人は夫のお蔭で恵まれた生活を営むことができ、そのよい状態は死後も続くと思っている。だからこそ彼女は殺されることを願い、親族や社会もそれを支持することができるのである。

以上のことからすれば、パプアニューギニアのカリアイ地区におけるルシ族の未亡人殺しは「人殺し」としてではなく、デュルケームのいう「自殺」として扱われるべきだとする指摘は妥当であろう。では、デュルケームの自殺類型とはいかなるものであろうか。

3. デュルケームの自殺類型

デュルケームの『自殺論』は、現在では自殺論の古典と目されている名著である。¹⁷⁾彼は、まず自殺原因を非社会的要因と社会的要因に分け、さらに社会的要因を「自己本位的自殺 suicide égoïste」と「集団本位的自殺 suicide altruiste」と「アノミー的自殺 suicide anémique」の三つに分ける。第一と第二の自殺類型は、社会的拘束力の強弱によって区別される。例えば同じキリスト教徒であっても、プロテスタントでは聖書解釈に関して教会の拘束力が弱くて個人の自由が大きいゆえに、カトリックよりも自殺者が多く、また既婚者よりも身軽な独身者のほうが自殺数が多いとされる。このように第一の自殺類型は、社会的拘束力が弱ければ弱いほど自殺者が多い場合である。第二の自殺類型は、社会的拘束力が強すぎて、個人がもはや適応できなくなる場合である。デュルケームはその典型的な例として軍人を挙げる。

ルシ族の未亡人殺しのような事例は「集団本位的自殺」の一種として扱われる。デュルケームは次のように述べる。「それらの民族 [トログロディテス族やセレース人] においては、老人のみならず、夫が死ぬと妻もしばしば後を追わなければならなかったことはよく知られている。この野蛮な慣行は、インドの風習のなかに非常に強く根をはっており、イギリス人の努力のいかにもなく長く生きつづけている」¹⁸⁾と。そのうえで「集団本位的自殺」をも、(1)老年の域に達した者、あるいは病に冒された者の自殺、(2)夫の死のあとを追う妻の自殺、(3)首長の死にともなう臣下や家来の自殺、の三つに分類する。¹⁹⁾これらは社会が個人に自殺を強要する点で共通する。(1)については、老人が自殺を選ぶのは、衰弱や病苦からではなく、生き続けることで社会的に疎外され恥辱を与えられるからである。また(2)と(3)については、夫と妻、主人と家来という従属関係のゆえに、妻や家来は自殺を運命づけられるのだという。このようにデュルケームは、妻のあと追い自殺を殉死の一形態として捉えようとする。

第三の類型は、社会が混乱や無秩序に陥り、拘束力や規範が無効となる場合である。個人との関係から言えば、社会がその無秩序のゆえに、個人に対して統合力を欠く場合である。デュルケームはこうした状態を「アノミー anomie」と呼ぶ。²⁰⁾無政府状態は言わばこの典型である。この

状態は第一の自殺類型と同じように見えるが、第一の場合には、社会の拘束力や規範までもが崩れるわけではない。結局は自殺に至る動機に違いがある。第一の場合には、社会との関係を断って孤立的な生き方を求める者が、その拠り所を失って、絶望感や無力感に襲われることで自殺に至る。第三の場合には、経済危機などによって社会が突然に機能停止に陥り、人々の肥大化した欲望が満たされずに、社会に焦燥や不満が蔓延して自殺が生じる。日本でも1990年のバブル崩壊以降、伝統的な雇用形態が崩れて社会への信頼が大きく揺らぎ、働き盛りの40～50歳代の自殺者が急増した。その傾向は今日でも続いているが、これなども社会的統合力の不足が原因である。

以上の三つが自殺の基本類型である。これにさらに、第一と第三を組み合わせた自己本位的なアノミー的なもの、第二と第三を組み合わせたアノミー的な集団本位的なもの、第一と第二を組み合わせた自己本位的で集団本位的なものに加えられ、全部で六つの自殺類型になる。しかし組み合わせがどうであれ、基本類型が社会実態を反映していなければ意味はない。その点で最も問題になるのは、アノミー的自殺である。

デュルケームは、著しい社会不安をもたらした歴史的な事件として、1873年のウィーンの金融危機、1882年のパリの株式市場の破局などを挙げ、これらの翌年には、自殺数が急増したことをデータによって実証する。短絡的に見れば、金融危機や株価暴落が貧困層を拡大して、自殺数を増加させた結論づけられる。もしそうであれば、好景気のときには自殺数は減少するはずである。だが1870年の普仏戦争直後のドイツ統一、1878年のパリ博覧会の際には、自殺数は減るどころか逆に増えた。金融危機や株価暴落などの経済要因は自殺数の増加と直接には関係ないのである。いや、むしろ貧困が自殺を抑制しているとも言える。では、なぜ産業的・金融的な危機が自殺数を増加させるのであろうか。

デュルケームは、それは産業的・金融的な危機が社会秩序を揺るがすからだと指摘する。そして動物の本性と人間の本性を比較しながら、この点について詳述する。動物の場合には、欲求と手段は均衡し、消費エネルギーだけが補償され、余剰エネルギーは貯蔵されない。こうした法則は、生物体の構造に根ざし、生理的・化学的に決定される。しかし人間の場合には、欲求と手段の関係は不均衡なので、欲求は無限となって努力が報われないか、あるいは一時的に報われたとしても、さらなる欲求が生じて、欲求不満は解消しない。それゆえ欲求不満を解消するためには、欲求への情念（passion）を能力に応じて限界づける必要がある。²¹⁾

情念を限界づけるものは、個人の外部にある必然的な力、つまり社会である。社会が直接的に、全体的に、また場合によっては諸器官の一つを媒介にして、この規制的作用を果たすことができる。²²⁾ 社会こそは個人を従わせる唯一の権威だからである。各個人はこの権威下で自身の欲求を限界づけることができる。しかし何らかの原因で社会が混乱に陥ると、生活の諸条件が変わって、社会は個人に対する規制力を失う。こうした状況では、人々は何が可能で何が不可能であるのか、何が正しくて何が不正であるのかを見極められずに、欲望が多方面に拡大して、伝統的権威は情

念に対する統制力を失う。これがアノミー状態である。この状態では、欲望は限界づけられず、生への意欲は深まるばかりである。よって渴望は満たされることがなく、自殺数が急増する。ところが逆に貧困状況では、欲求充足の手段が抑制されるので自殺数が減少する。

このように「アノミー的自殺」とは、社会の無秩序、無統制な状態での自殺をいう。因みにリースマンも群衆の行動分析のために「アノミー」という概念を使用した。彼は該概念を「不適応型 maladjusted」の意味で解し、自律的な人間が社会の行動規範に一致する能力をもつものに対して、アノミー的人間はその能力に欠けると定義した。²³⁾またJ. タンストールは、『老いと孤独』において、アノミーを「社会的植物人間化」、つまり社会的価値観から切り離された「孤独」と定義し、高齢者が特にこの傾向をもつことを指摘した。²⁴⁾

このように従来の自殺論が、個人の身体的・心理的傾向に基づくか、あるいは気候、気温などの物理的環境に基づく非社会的要因を強調したのに対して、デュルケームは、自殺の多くが社会的要因によることを明らかにした。彼の自殺論は当時としては斬新で画期的なものであり、構造的にはフロムの自由論とも相通じる。フロムも大衆社会の出現に伴い、自由のゆえに孤独と不安に苛まれた現代人が、権威主義的性格にコミットしたがることを指摘し、そのような大衆心理が一面でナチズムを招来したとみる。²⁵⁾もちろん、この言説をそのまま自殺論に結びつけることはできないが、彼のいう権威主義的性格が拘束力の強い社会と密接に関連するのは明らかである。しかしながら「自己本位的自殺」や「集団本位的自殺」はもちろん、この「アノミー的自殺」にしても、高齢者の自殺原因を説明するには不十分である。なぜなら今日の状況は、デュルケームの時代とはかなりかけ離れているからである。

4. 高齢者の自殺原因

日本では60歳以上の自殺数は、平成8年に8,244人、平成9年に8,747人であったが、平成10年に一気に11,494人に撥ねあがり、以後毎年1万人台を続けている。²⁶⁾しかし他の年代層に比べて高齢者の自殺率が高いことは昔から指摘されているので、このこと自体は特筆すべきことでもない。高齢者の多くは、子育ても一応終わり定年退職をして、年金生活をする者たちである。彼らには「中年危機」に当たるような「危機」が特に存在するわけではない。それゆえ高齢者の自殺対策については、中年男性とも異なる方向での検討が必要である。これまでどちらかと言えば、中年男性の自殺に多くの目が向けられ、高齢者の自殺については等閑にされがちだった。2010年8月に発覚した「高齢者の所在不在問題」²⁷⁾は、自殺問題とは異なるけれども、こうした高齢者の問題点を改めて浮き彫りにした。だが他の年代層に比べて、高齢者の自殺原因を把握しにくいのも事実である。高齢者は自らの悩みや苦しみをあまり口外したがないからである。こうした事情は日本に限らず外国においても認められる。²⁸⁾

老年の範囲は、時代とともに少しずつ変化している。日本の場合には年齢に応じて、戦前は50

歳代半ばで、戦後は60歳で、そして今日では65歳で老年の烙印を押される。加齢による区別は、定年制や年金制度と密接に関連し社会的なものである。かつては人並みの仕事ができないとか、人助けが必要であるとか、病気であるとか、いったことが老年の条件であった。「働かざるもの食うべからず」というパウロの戒めは、人類が共同生活を営み始めたときに生まれた。『楯山節考』のおりんの歯は、年齢に似合わず丈夫であった。歯が丈夫であるということは、食べ物を噛み砕くことができ、健康であることを意味した。彼女はこれを逆手にとり、わざと前歯を折ることで「楯山まいり」に行くという老人の義務を果たすことができた。²⁹⁾

近代以降、老年層は加齢により労働市場から締め出されることで出現した。しかし平均寿命が大幅にアップした現在、「65歳以上」という年齢基準だけでは多様な老い像を描くことが難しくなっている。これまで行政は、高齢者に「お年寄り」や「ご老人」というレッテルを貼るだけでよかった。しかし平均寿命が、男性で79歳、女性で86歳、男女平均で83歳となった現在（2010年統計）、紋切り型行政の弊害が「高齢者の所在不在問題」にも現れている。一口に高齢者といっても、平均寿命の延長に伴いかなりの幅があるので、年齢に応じた細かい対応が必要になっている。

65～75歳未満の高齢者は前期高齢者、75歳以上の高齢者は後期高齢者と呼ばれる。このうち後期高齢者の自殺数³⁰⁾は、フランスやアメリカなどでは増加傾向にあるが、中国では減少傾向にある。日本の場合、女性は増加傾向にあるが、男性および全体は減少傾向にある。よって「高齢者の死因ではとくに近年80歳以上で自殺の頻度が男女とも増加する」³¹⁾といった指摘も見受けられるが、実際にそのとおりであるかどうかは疑わしい。³²⁾いずれにしても、他の年齢階級と比べて、65歳以上の高齢者の自殺率が著しく高いことは確かである。では、高齢者の自殺原因は何であろうか。

警察庁の「平成21年中における自殺の概要資料」³³⁾によると、一般には自殺原因は、健康問題（47%）、経済・生活問題（25%）、家庭問題（12%）、勤務問題（3%）、学校問題（1%）などである。60歳以上の人の自殺原因は、健康問題（61%）、経済・生活問題（18%）、家庭問題（14%）、勤務問題（2%）などで、上位の三つは一般の傾向に準ずる。ただし、その割合については、健康問題が61%と大きな比重を占め、経済・生活問題はその分減少している。その内訳は、病気の悩み（身体の病気）が52%、病気の悩み・影響（鬱）が32%、病気の悩み・影響（総合失調症、アルコール依存症、その他の精神疾患など）が10%などである。以上のことから、健康問題が高齢者の自殺原因の中心となっていることが分かる。しかし健康問題のみならず経済問題、生活問題、家庭問題なども自殺原因に複合的に関与している可能性がある。³⁴⁾

次に高齢者の自殺論に関しては、精神障害説と老化説の二つがある。³⁵⁾前者は、自殺者の多くに精神障害の既往症や徴候が認められることを根拠に、特に情緒障害を自殺原因とするのに対して、後者は、老化は自殺誘発性を有する精神病理的なものであって、精神障害や自殺は老化と密接にかかわるとする。³⁶⁾高齢者は自身の悩みや苦しみを普段からあまり口外したがない。その

ために自殺原因は、本人からの直接証言によってではなく、近親者や友人からの間接証言によって事後的・回顧的に推定される。よって精神障害説は確実性に欠ける。それにまた、精神障害罹患率に関しては若者のほうが高齢者よりも高く、自殺率に関しては高齢者のほうが若者よりも高いと言われる。³⁷⁾この点からすれば、精神障害ではなくて老化が自殺原因であると考えられる。とはいえ、老化説のように、健康、経済力、仕事、交際等々に関する、老化による負担や喪失が自殺原因である、などと簡単に断じることもできない。例えばアメリカでは、社会進出のチャンス、労働条件、離職率、交際範囲のいずれにおいても、女性は男性よりも不利であるが、女性の自殺率は男性より低いと言われる。³⁸⁾こうした例からも分かるように、老化による負担や喪失がそのまま自殺に繋がるわけではない。

「老化 aging」というのは、多岐的な概念である。一般的には、老化は「誕生(または妊娠)とともに始まり死とともに終わる生物学的、心理学的、社会学的な相互作用の過程」³⁹⁾と定義される。また老化とは、生物学的・医学的には「退行過程」「活力低下」「瞬間死亡率の増加」「個体生存力の低下」「心身の機能低下」などと⁴⁰⁾、社会学的には「役割の縮小や喪失の過程」と⁴¹⁾、心理学的には「心理的特性の変化」「パーソナリティの変化」「諸能力の変化」などと⁴²⁾、歴史学的には「エンジグ像の変化」「高齢者像の変化」⁴³⁾などと定義される。つまり、老化は「退行」「低下」「変化」などを含意し、従来「可能」であったことが「不可能」になることを意味する。老化は鬱に繋がりがやすく、高齢者の鬱罹患率は他の年齢層と比べて高い。また鬱は自殺リスクを高める。⁴⁴⁾よって鬱は自殺の直接原因であるのに対して、老化は自殺の間接原因であると言える。

5. 「場」のモデルとしての銭湯文化

現代人は定年に達すると一様に「老人」に組み込まれ「場」から締め出される。かつての老人と比べると、現代の老人は経済的にも医学的にもはるかに恵まれた状況にある。かつての老人は、壮健でなければ長生きできなかつたし、その末路も概して哀れであった。例えば『平家物語』の妓王が清盛の再三の要請を固辞したとき、母とじの狼狽ぶりはいかばかりであったであろうか。⁴⁵⁾ 卷一の「妓王」におけるとじは、45歳の白髪老女として描かれている。彼女は、清盛の参上要請を固辞する妓王に対して、「年老おとろへたる母、都の外へぞ出されんずらむ。ならばぬひなのすまひこそ、かねて思ふもかなしけれ。唯われを都のうちにて、住果させよ。それぞれ今生・後生の孝養と思はむずる」⁴⁶⁾などと諫めている。また妓王が清盛から恥辱を受けて妹と一緒に死ぬ覚悟をしたときも、「二人のむすめ共におくれなん後、年老おとろへたる母、命いきてもなにかはせむなれば、我もともに身を投げむと思ふなり」⁴⁷⁾と追隨の意志を示しているものの本音ではない。このように一昔前まで老人の命運は子どもの経済力にかかっており、とても自立できる状態ではなかつた。

高齢者が自立するための条件として、経済力の確保、健康の維持、諸能力の維持管理などがあ

る。いくら健康であっても、現代のように高度に分業化した社会では、相応の経済力がなければ衣食住を安定的に維持することができない。もとより衣食住は人間生活の基本条件であるから、これを欠く場合には自立生活も困難となる。次に健康については、身体的に健康であることが最も肝要である。ベッドに寝たきりとか、人や器械の支えがないと生きられないとかいった状態では、自立力の低下は否めない。高齢者が鬱になりやすいのは、このような身体能力の低下ないし欠如に伴って精神が傷つき、やがて慢性化するからである。その意味では、「健全なる精神は健全なる身体に宿る」という格言は妥当である。もちろん、心身症のように、身体のどこにも悪いところがなくても、社会的なストレスから精神が病んで身体に悪影響をおよぼす場合もある。しかし高齢者の場合には、仕事上のストレスは軽減されるのが普通である。にもかかわらず、高齢者の自殺率が高いのはなぜなのか。またどうすれば、高齢者の自殺率を引き下げることができるのか。

高齢者は他の世代よりも鬱になりやすい。そのこと自体は老いの身体性と関連し避け難いことである。躁と鬱は、程度差はあれ、だれにでもある。われわれはよいことに接すれば気分が軽快になり、悪いことに接すれば気分が鈍重になる。それが人間の性というものであろう。だから高齢者の鬱傾向については、さほど心配するにおよばない。それよりも高齢者が自身の不安や悩みを口外せずに心の奥に溜めておくことのほうが深刻である。そのような状態ではストレスは溜まるばかりである。それゆえストレスを解消するためには、高齢者が気軽に語り合える「場」が必要である。

日常性から逸脱した「場」は、どんなに見栄えがよくても、不自然で寛ぎにくく、あまり望ましいものではない。では、望ましい「場」とはいかなるものをいうのか。一例を示せば、銭湯（江戸）や風呂屋（関西）。日本人は風呂好きなので、昔から銭湯文化が存在したかのように思われがちだが、そうではない。銭湯は、江戸中期以降巷間で流行し⁴⁸⁾、家庭風呂が普及する以前の昭和の高度経済成長期頃まで、ごく普通に各所で見られた。「心ある人に私あれども、心なき湯に私なし」⁴⁹⁾とあるように、銭湯は老若男女を問わず平等な「場」であった。また銭湯は「身を温め、垢を落とし、病を治し、草臥を休むる」⁵⁰⁾を目的とする憩いや社交の「場」でもあった。老人たちはここで身の上話や世間話をしながらゆっくりと過ごすことができた。⁵¹⁾式亭三馬は『浮世風呂』でそうした「場」としての銭湯の様子を軽妙洒脱に描いている。

銭湯にも仁義礼智信の五常というものがある。⁵²⁾仁は先述の「湯を以て身を温め云々」をいい、義は「桶のお明はござりませぬかと他の桶に手をかけず。留桶を我儘につかはず。又は急で明て貸すたぐひ」をいい、礼は「田舎者でござい、冷物でござい、御免なさいといひ、或はお早い、お先へと濱べ、或はお静に、お寛りなどいふたぐひ」といい、智は「糠洗粉軽石糸瓜皮にて垢を落とし、石子で毛を切るたぐひ」をいい、信は「あつといへば水をうめ、ぬるいといへば湯をうめる。お互いに背後をながしあふたぐひ」をいう。このうち仁は銭湯の目的、智は銭湯の効用を

示し、残りの義礼信は銭湯での相互配慮の作法を示している。

銭湯ではしばしば盗難事件も生じた。犯人は、捕まれば棒しばりにして、顔に油を塗られて追放された。しかし「我から招く禍は、他人の一切存不申事 [一切存じ申しぬ事] ならずや」⁵³⁾ というのが銭湯の原則であって、被害者にも非を認めている。そうした盗難防止の意味もあったのであろう。関西の風呂屋にはなかったが、江戸の湯屋には2階があり、そこに古参の番頭が控えていた。この利用客は美服や所持品を持った裕福な男たちで、彼らには茶が振る舞われた。また寿司、菓子、膏薬、歯磨粉なども売られ、1か月に6日ほど囲碁や生花などの稽古も行われたという。⁵⁴⁾

このことから銭湯や風呂屋が当時社交の「場」として、いかに大切であったかが分かる。なお、髪結床も銭湯と同じように社交の「場」の一つであった。⁵⁵⁾ 町々に「会所」が設けられ、そこに髪結師が住み、庶民が集まった。このように「床」を持った髪結師の他に自分から出前して歩く髪結師もあり、「まわりのかみゆひ」と呼ばれた。⁵⁶⁾ 髪結床も銭湯と同じように株仲間を形成し、入湯料はだいたい一定で、幕府の管轄下にあった。三馬の『浮世床』には、楽隠居と見えたる老人が早朝に髪結床の玄関先に現れて、「起ねへか起ねへか。遅いぜ遅いぜ」と寝ている親方にせびる場面がある。⁵⁷⁾ 隠居の要求は、銭湯に行った帰りに最初に髪結をしてもらうことである。このように髪結床も江戸庶民に欠かせない「場」であった。

『浮世風呂』には何回か老人が登場する。それは三馬が老人の会話の面白さや魅力に気づいていたからであろう。例えば丸頭巾に紙子の袖なし羽織姿で、口をむぐむぐさせながら杖にすがり、丁稚に伴われた70歳ばかりの隠居。⁵⁸⁾ 彼は深夜に犬の啼き声で目が覚めて眠れなくなり、家中を巡回したことを告げる。また銭湯の2階で医者と囲碁をさす隠居もいる。⁵⁹⁾ 彼は最近身内に病人が出て碁をうつ暇がなかったと愚痴をこぼす。また死後話題にされる老人もいる。⁶⁰⁾ その友人たちのやり取りに「六郎兵衛さんも能 [いい] 老入だ。息子たちはよく粒が揃って、皆大丈夫なり、娘はそれぞれにかたづくし、モウ孫も五六人ある。今往生すれば残る事はねへのさ。あの人も若い内苦労したから、老て楽をする。」とある。その当時にも、苦労して育て上げた子どもから孝養されることを人生の喜びとする風潮があった。

極めつけは、湯船の脇に糠をこぼしながら口をむぐむぐさせる70歳のさる婆と60歳のとり婆の二人。⁶¹⁾ 彼女たちの会話は生き生きとして、リアリティに富む。例えばさる婆が下戸ゆえに老いの苦しみから解放されずに「娑婆には倦じ果てた」「早くお如来さまのお迎をまつさ」などと述べるのに対して、とり婆は「死んだ跡は勝手にするがいい。此世の事さへもしれねへものが、死んだ先がどう知れるものか。寝酒の一盃ツ、も吞んで快く寝るのが極楽よ」「こちとらは不断息子や嫁に云って聞かせるのさ。手めへたちはの、おれが活て居る内にうまい物をたんと喰せろとの。死んだ跡で目がさめるな。」などと述べ、二人の会話はテンポよく流れる。また湯船での嫁評も対照的である。とり婆の嫁はよくできているが、孫が授からないことが悩みの種。一方、

さる婆には5人の孫があつて一見幸せそうである。だが彼女は、嫁が大食いの大酒飲みで、家事をしないうえに口達者で寝てばかりいると不平を漏らす。するととり婆が「姑は遠くへ退居がいい。とかく姑が口を出すと収まらねへよ。おめへ死にたい死にたいといふから、死んだ気になって居れば、何もやかましい筈はねへ」⁶²⁾などと論ず。さしずめ現在なら、カウンセラーが言いそうな台詞である。このような会話が湯船で交わされることがなんとも妙である。

問題はこれらの会話が虚構か現実かといったことではない。二人の老婆がだれからも干渉されずに自由に語り合える「場」があることが重要である。ここでの会話が真実のように思えるのは、彼女たちが日頃の警戒感や緊張感から解放されて、そのありのままの姿を曝け出すのに銭湯が格好の「場」だからである。つまり、会話にふさわしい「場」こそが会話にリアリティを与えるのである。とはいえ、今日ではこうした「場」を見いだすことはますます困難になっている。だから風呂文化をいわずらに吹聴するのもどうかと思うが、老いの「場」のモデルとして、銭湯を捉え直してみるのも悪くない。失われた老いの「生きがい」が垣間見えるに違いない。

註

- 1) 日本人の自殺データを正確に知るには、警察庁「自殺の概要資料」、厚生労働省「人口動態統計」、厚生労働省「自殺死亡統計／人口動態統計特殊報告」を参照するとよい。これらのデータはインターネットで公開されており、日本の自殺疫学の基礎になっている。
- 2) <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/12/h1218-3.html>
- 3) Cf. Dorthy Ayers Counts, "Revenge Suicide by Lusi Women: An Expression of Power," Denise O'Brien & Sharon W. Tiffany (eds.), *Rethinking Woman's Roles: Perspectives from the Pacific*, Los Angeles: University of California Press, 1984, p.75. <http://anthropology.uwaterloo.ca/WNB/FemaleSuicideWifeAbuse.html>
 カウントは1966年から1976年までの間にカリアイに3回滞在し（合計23カ月間）、3人の女と2人の男の自殺および女の自殺未遂について詳細な情報を得た。また彼女は、1979年から1985年までの間に7人の女の自殺と1人の男の自殺未遂があり、さらに1985年の5月から10月までの間に4人の女の自殺があったと報告している。いずれにしても、四半世紀から半世紀ほど前の出来事なので、その点は重々肝に銘じる必要がある。
- 4) カウントによれば、次のような内容である。「私が働いた村の二人の有力者は、自分たちの祖母の儀式的な殺しを目撃しており、このような死が次のように行われたと教えてくれた。時折、有力者の未亡人は、自分の息子たちや夫の兄弟たちに、夫が死んだら直ぐに自分を殺すように頼んだ。もし夫の親族がみんな賛成してくれるなら、彼女はパンドスのマットの上に跪いて、夫の親族の一人——たいては長兄——が紐で彼女の首を絞めるか、あるいは特にその目的で作られた木剣で頭蓋骨の根元の首を壊すだろう。未亡人の行為は、彼女が死にたがっている

ことを夫の親族に示していた。彼女は夫の遺体やその埋葬を悲しむのではなく、いやに明るく、喪中に一人になってその身なりをするよりも、自分の家や庭での日頃の仕事に精を出した。このように祖母の死を目撃した一人の資料提供者は、婦人自身にも、夫の親族にも、彼女の行為に対する悲しみの表情がなく、死が社会を分裂させるものではないとコメントした。私の情報提供者は、未亡人が死を求めそこなっても恥ずかしいことではないと述べた。しかし彼らは婦人の殺されたいという要求を、有力者との結婚で得た名声と豊かさを享受してきた老女の合理的な行為として解釈した。一旦未亡人になれば、子どもたちの世話になることに耐えられなかった。子どもたちは、彼女を無視するか、あるいは年齢のために、つまり、不幸なことであるが、老女の一般的な宿命のために、その能力が落ちるとき、非生産的な扶養家族がもう一人増えることを恨むかもしれない。私の情報提供者は、儀式的に殺された未亡人の魂は、魂の村 [あの世] で夫と一つになって永遠に一緒に暮らしたがる」と述べた。カリアイ地区のルシ族は、男の魂と女の魂はたいてい別々の村で暮らし、互いに独立しているので、死後夫婦が一緒になることはまれであるが、もしそれができれば、彼らはたぶん生前に味わった緊密な愛情関係を維持することができる」と信じている」

(<http://anthropology.uwaterloo.ca/WNB/FightingBacknottheWay.html> 参照)

- 5) 穂積陳重『隠居論』(復刻版) 日本経済評論社 1978年 57頁。
- 6) 同書 48-49頁。
- 7) ボーヴォワールは、小説のような棄老俗がつい最近まで日本に存在したらしいなどと述べている。『古い』は名著の一つであるが、その点は差し引いて評価する必要がある。Cf. Simon de Beauvoir, *La Vieillesse*, Edition Gallimard, 1970. ボーヴォワール『古い』(上巻) 人文書院 1972年、64頁参照。
- 8) 『枕草子』は244段(『日本古典文学大系』(第19巻) 岩波書店 1958年 264頁参照) に、『今昔物語』は「天竺・震旦部」の巻五の第32にそれぞれ見える
- 9) 『大和物語』は156段(『日本古典文学大系』(第9巻) 岩波書店 1957年 327-328頁参照) に、『今昔物語』は「本朝世俗部」の巻三十の第9(『日本古典文学大系』(第26巻) 岩波書店 1963年 236-238頁) にそれぞれ見える。
- 10) 穂積陳重『隠居論』66-92頁参照。
- 11) 柳田國男『遠野物語拾遺』268(『遠野物語』角川書店 1977年180-181頁) 参照。
- 12) 青柳まちこ編『古い人類学』世界思想社 2004年 152頁参照。
- 13) Ch. James Rachels, "Active and Passive Euthanasia," *The New England Journal of Medicine*, Vol. 292, No. 2 (Jan. 9, 1975, pp.78-80). ジェイムズ・レイチェルス「積極的安楽死と消極的安楽死」(加藤尚武・飯田亘之編『バイオエシックスの基礎』東海大学出版会 1988年 113-121頁所収) 参照。

- 14) 同書 57頁
- 15) 同上
- 16) 拙著「日本人の老い観—老い文化の底流を求めて—」『広島大学大学院研究科論集』第66巻 2006年 28—29頁参照。
- 17) Cf. Émile Durkheim, *Le Suicide: Étude de Sociologie*, nouvelle édition, 3^e trimestre, Paris: Presses Universitaire de France, 1960. デュルケーム『自殺論—社会的研究—』（宮島喬訳）（『世界の名著』第47巻 中央公論社 1968年）参照。
- 18) Émile Durkheim, *op. cit.* p.235. 同書167—168頁。
- 19) *Ibid.* 同上。
- 20) Cf. Émile Durkheim, *op. cit.* p.266. 同書195頁参照。
- 21) Cf. Émile Durkheim, *op. cit.* p.275. 同書205頁参照。
- 22) *Ibid.* 同書206頁参照。
- 23) Cf. David Riesman, *The Lonely Crowd: A study of the changing American character*, New Heaven & London, Yale University Press, 1961, p.241f. リースマン『孤独な群衆』（加藤秀俊訳）みすず書房 1993年 225—226頁参照。
- 24) J. タンストール『老いと孤独—老年者の社会学的研究—』（光信隆夫訳）垣内出版株式会社 1978年 57—58頁参照。
- 25) Cf. Erich Fromm, *Die Furcht vor der Freiheit, Gesamtausgabe Bd. I*, Stuttgart, Deutsche Verlag-Anstalt, 1980. E. フロム『自由からの逃走』東京創元社 1991年参照。
- 26) 警察庁「平成21年中における自殺の概要資料」参照。
(http://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/220513_H21jisatsunogaiyou.pdf)
- 27) 2010年の夏に高齢者の所在不明問題が浮上した。法務省は9月10日現在、戸籍に現住所が記載されていない100歳以上の高齢者が、全国で23万人以上いるという見通しを示した。2009年現在日本の平均寿命は、男性が79.59歳で世界第5位、女性が86.44歳で世界第1位と相変わらず高水準を維持しているものの、こうした実態が明るみに出たことで、海外からはデータの信憑性が疑われている。これを機に、これまでの高齢者行政を全般的に見直す必要がある。
- 28) 世界保健機関の「自殺防止」の「年齢階級・性別による自殺数の国別データ」によると、65歳以上高齢者の自殺は、日本（2007年）では男性が24.1%、女性が36.1%、全体で27.5%。アメリカ（2005年）では男性が17.6%、女性が12.76%、全体で16.65%。ヨーロッパでは、イギリス（2007年）が男性で13.8%、女性で19.4%、全体で15.0%。ドイツ（2001年）は男性で32.9%、女性で41.7%、全体で35.2%。フランス（2006年）は男性で28.8%、女性で29.2%、全体で28.2%。因みに中国（1999年）は都市部で男性が24.9%、女性が27.6%、全体で26.2%。農村部で男性が30.6%、女性が26.0%、全体で28.1%。また都市部と農村部を合わせて、男性が

29.0%、女性が26.4%、全体で27.6%。

http://www.who.int/mental_health/prevention/suicide/country_reports/en/index.html

29) 深沢七郎『栖山節考』新潮文庫 2004年 40頁参照。

30) これを知るには、65～74歳に対する75歳以上の自殺数の増減比率を見るとよい。まず日本は男性で-29%、女性で+13%、全体で-15%。アメリカは男性で+35%、女性で+11%、全体で+30%。イギリスは男性で+6%、女性で-6%、全体で+2%。ドイツは男性で-5%、女性で+36%、全体で+6%。フランスは男性で+52%、女性で+20%、全体で+42%。中国は都市部と農村部を合わせて、男性で-24%、女性で-18%、全体で-20%。

31) 大内尉義・秋山弘子編『新老年学』（第3版）東京大学出版会 2010年 499頁参照。その根拠になっているのが、厚生労働省「人口動態統計」の「性・年齢階級別自殺死亡率（人口10万対）の推移」のデータである。これとほぼ同じデータは、厚生労働省の「自殺死亡統計／人口動態統計特殊報告」でも確認できる。ただし、こちらは「性・年齢階級別自殺死亡率（人口10万対）の年次比較」としており、調査最終年も平成15年である。またこちらの解説には「男女とも、70歳以上では死亡率の低下傾向がみられる」とある。ほぼ同じデータを用いながら、なぜこのように両者においては分析結果が異なるのであろうか。70～74歳の自殺数は、昭和25年から平成5年頃まで減少し続け、その後一旦は平成10年頃まで増え続けるものの、その後は再び平成15年まで減少し続ける。それゆえ「年次推移」に限って言えば、70歳以上の自殺死亡数は確かに低下傾向にあると言える。だが75歳以上になると自殺数は増加すると見られている。ただし、同一のデータから、「近年」の傾向までも読み取るのは難しいと言わなければならない。

32) 『新老年学』499頁参照。その根拠として厚生労働省「人口動態統計」の中の「年齢階級別自殺死亡率（人口10万対）の推移」の資料を挙げているが、これは「性・年齢（5歳階級別）別自殺死亡率の年次比較」の誤りではないと思われる（厚生労働省「人口動態統計特殊報告」参照）。この資料に基づくかぎり、平成2年と平成16年に関しては、78歳以上の男性の自殺率が70～77歳頃の男性の自殺率よりも高いことが読み取れるが、女性についてはそうではない。高齢になれば生存者数の分母も小さくなるので、自殺率は相対的に高まると考えられる。しかしながら、ここから「近年自殺の頻度が…増加する」という事実は得られない。なお、「人口動態統計特殊報告」は「男女とも、70歳以上では死亡率の低下傾向がみられる。」と指摘している。こちらのほうが妥当な分析であるように思われる。

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuu/suicide04/index.html>

33) http://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/220513_H21jisatsunogaiyou.pdf

34) その辺の事情を考慮して、警察庁は近年複数回答を認めた自殺原因の調査をしている。

35) Cf. James E. Birren (ed.), *Encyclopedia of Gerontology II*, Oxford: Elsevier Inc. 2007², p.576.

36) 『老年学』1189頁参照。

- 37) Cf. James E. Birren (ed.), *op.cit.* p.576
- 38) 日本の自殺状況はアメリカとは異なる。女性では、鬱頻度は男性の2～3倍、生涯罹患率は20%を超え、また自殺の完遂率は女性よりも男性が高いと言われる（『新老年学』500頁参照）。
- 39) James E. Birren (ed.), *Encyclopedia of Gerontology*, I, Oxford: Elsevier Inc. 2007², p.49.
- 40) 『老年学』4～5頁参照。
- 41) 同書 1588頁参照。
- 42) 同書 1594頁参照。
- 43) 同書 1599頁参照。
- 44) 同書 1189頁参照。
- 45) 梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』（一）岩波書店 1999年 36～60頁（巻一「妓王」）参照。
- 46) 同書48頁。
- 47) 同上。
- 48) 『近世風俗志』に「今世、江戸の湯屋、おほむね一町一戸なるべし。天保府命前は定額あり。湯屋中間と云ひ戸数の定めありて、これを湯屋株と云ふ。この株の価ひ、金三、五百両より、貴きは千余金の物あり。株数、天保前五百七十戸。」とある（喜田川盛貞『近世風俗志』（四）岩波文庫 2001年 103頁）。銭湯は最初庶民が勝手に始めたものであったが、後には幕府もその公共性を認知し、競争を避けるために湯屋株を認めて湯屋数を制限し、入湯料や風紀についても口出しをするようになった。つまり、銭湯は江戸期には既に芝居小屋と同様になくてはならない社交の「場」であった。
- 49) 式亭三馬『浮世風呂』前篇卷之上（『日本古典文学大系』63巻 1971年 47頁）。
- 50) 同上。
- 51) ただし、「定書」には「御老人御病後の御方様御一人にて御入湯かたく御無用の事」とあるので、お年寄り銭湯にいつでも自由に行けたわけではない（『近世風俗志』（四）111頁参照）。『浮世風呂』には丁稚に付き添われた隠居が見える。
- 52) 式亭三馬『浮世風呂』前篇卷之上（47～50頁）。
- 53) 同上（49頁）参照。
- 54) 喜田川盛貞『近世風俗志』（四）113頁参照。
- 55) 同書129頁参照。
- 56) 同上。
- 57) 式亭三馬『浮世床』「柳髪新話浮世床初篇卷之上」（『日本古典文学全集』（47巻）小学館 1971年 264頁参照）。
- 58) 同書 前編卷之上（57頁）参照。
- 59) 同書 前編卷之上（65頁）参照。

- 60) 同書 前篇卷之下 (88頁) 参照。
- 61) 同書 二編卷之上 (122頁) 参照。
- 62) 同書 二編卷之上 (127頁) 参照。

付記

本論文は文部科学省科研基盤研究 (C) 一般「老後生活の QOL と「場」に関する日中比較研究」(課題番号 21520015、研究期間2009年度 -2011年度) の研究成果の一部である。なお、本論文作成に当って「国文学研究資料館本文データベース検索システム」(http://base3.nijl.ac.jp/Rcgi-bin/hon_home.cgi) を活用した。

A Study on “Topos” of old people

—“SENTO” as a model of the places to prevent suicides —

Fumio MATSUI

For last years has the author occupied himself in studies on old people from a viewpoint of culture, in contrast with biology, medicine, sociology, psychology, etc. The purpose of this study, which is also part of them, is to consider the meaning of suicides by people over 65 years old and seek for a model of the places to prevent them. The present paper consists of a prologue and four chapters.

The number of suicides by middle-aged men has recently increased in Japan. They don't commit suicide voluntarily but are driven to do so. It is a matter with the way how we should prevent them from committing suicide. As to older age suicide, we must consider in another perspective. First, we refer to the case of ritual killing of Lusi widows in the Kaliai district of Papua New Guinea, in order to think of the discrimination between a “suicide” and a “homicide”. This case does not fall under a homicide in common with an euthanasia.

Secondly, we refer to “*Le Suicide*” written by Émile Durkheim, which is said to be one of well-known classic works. He insisted that the causes of suicide are almost reduced to social factors. There are three types of suicide: “suicide égoïste”, “suicide altruiste”, and “suicide anémique”. The above-mentioned case of Lusi widows is classified into the second type. The third type leads to the analysis of masses by David Riesman or Erich Fromm. We should pay attention to that the current situation is different from the situation existing at the time when Durkheim had lived.

Thirdly, we investigate the causes of older age suicide. It is said in general that the suicide rate of people over 65 years old is higher than that of other aged people. According to the National Police Agency, most causes of suicides are occupied with health issues. There are two theories of older adult suicide: the one basing a suicide on mental disorders, particularly affective disorders, the other blaming it on the burdens and losses of aging. One theory is closely associated with the other. The existence of the places, where old people can reveal their own anxieties and sorrows, is more important than the control of melancholy.

Fourthly, we deal with “SENTO” at the Edo period. Sanba Sikitei considers it as the place of recreation and relaxation, i.e. society, which is also useful for old people. He pays attention to the conversations between two old men. They can relieve their daily resentment by telling stories of their life or gossips. Their conversations seem to be an actuality, for the place of “SENTO” makes it possible to think so. It is such a model of the places that we should seek for today.